

大菩薩峠 「竜神の巻」 中里介山

—

天誅組がいよいよ勃発したのは、その年の八月のことでありました。十七日には大和五条の代官鈴木源内を斬って血祭りにし、その二十八日は、いよいよ総勢五百余人で同国高取の城を攻めた日。その翌日、十津川へ退いて、都合二千余人で立籠った時の勢いは大いに振ったもので、この分ならば都へ攻め上り、君を助けて幕府を倒すこと近きにありと勇み立ち、よく戦いもしたけれど、紀州、藤堂、彦根、郡山、四藩の大兵を引受けてみて、力が足りないのは是非もないことでした。

侍従中山忠光は浪花へ落ち、松本奎堂、藤本鉄石、吉村寅太郎らの勇士は、或いは戦死し、或いは自殺して、義烈の名をのみ留めた——十津川の乱の一挙は近世勤王史の花といふべく、詳しく書けば、ここにまた一つの物語を見出されようけれども、それはここに必要を認めず。いよいよ、これらの一味の者が散々になって、或る者は伊勢路へ、或る者は紀州領へ、或る者は大阪方面を指して、さまざまに姿を変えて落ちた後のことでもあります。驚家口の戦いから落ち延びた十一人の浪士が、木にも草にも心を置いて風屋村というところへさしかかって、

「ああ、水が飲みたい」

「水が欲しい」

村とはいふものの、ここは十津川郷の真中で名にし負う山また山の間です。十津川の沿岸を伝うて行けばなんのことはないのですけれども、四藩の討手が、残党一人も洩らすまじと、夜となく日となく草の根を分けている際ですから、それはできませんでした。

大日ヶ岳へ連なる山々を踏みわけて、木の繁みを潜り歩いて行くのだから、水にも遠くなる。水、水というけれども、木莓一株を見つけ出してさえ、十一人の眼の色が変わるくらいですから、その腹の応えは思いやられるのです。

「川岸まで戻ってみようか」

眼を見合せて惨澹たる面の色。

「それはよせ、さいぜん鉄砲の音が聞えた。拙者の考えでは、これをずっと向うへ横に切って、紀州の日高郡をめぐすが無事だと思う」

「道程は……」

「風屋——小森——平松——三本磯と行って、紀州日高郡の竜神へ凡そ十三里」

「その間の兵糧は……」

「さあ、それが……」

一同は口を噤んで足が動かない。

「おのおの方、あれを見られよ、煙が棚引いている」

沈んだ声で後ろから言い出したのは、あの時以来、何をしていたか、ともかくここまで傷一つ受けずに来た机竜之助でした。

翠微の間に一抹の煙がある——煙の下にはきつと火が

ある、火の近いところには人があるべきものにきまっています。

「なるほど、煙が立つ、拙者が様子を見て来よう」

村本伊兵衛というのが出かける。

「よし、我輩も行こう」

荷田重吉がいう。村本と荷田は連れ立って、その煙の方へ行ってみます。あとの九人は、木の根と岩角とに腰をかけて、その斥候を待っています。

「諸君、仕合せよし」

村本と荷田は欣々として帰って来て、

「山小屋がある、その中には、猟師と見えるのが、炉に火を焚いて、何やら獣の肉を煮ている」

「ナニ、獣の肉を？」

肉と聞いて、うまそうな唾が口の中から迸るようであつた。

「敵の間者ではないか」

「いや、そうではないらしい、たしかに生えぬきの猟師と見受けた」

「おしかける」

「行ってみろ」

村本と荷田は案内する。九人はそれについて行って見ると、山腹のやや平らかなところを程よくこなして、そこにかなり大きな掘立小屋があります。

「頼む……」

「うあ……」

中で妙な調子の返事がある、面を出したのはまさに猟

師に違いない。ずっと前に、はじめて三輪の藍玉屋の不良息子の金蔵に鉄砲を教えた惣太でありました。

惣太は面を出して見ると、都合十一人、筒袖に野袴をつけたのや、籠手脛当に小袴や、旅人風に糸楯を負ったのや、百姓の蓑笠をつけたのや、手創を布で捲いたのや、いずれも劇しい戦いと餓とにやつれた物凄い一団の人でしたから、

「やあ、お前様方は何だ」

「驚くことはない、これから紀州の方へ通る者だが道に迷うた、暫らく休息させてもらいたい」

「へえ、よろしゅうございます、こんな狭苦しいところでございますが」

惣太は杉板を三枚合せて綴った戸をあけて、中へ一行を招じ入れたが、気味の悪いことは夥しい。

「お前様方は、あの天誅組のお方様でございますか」

「何でもよろしい、そこを締めろ」

「へいへい」

「さあ、猟師、何か食うものはないか」

「別に何もございませぬ、なにしろ、この通りの山小屋でございませぬからな」

「それは何だ」

「これは猪でございます」

「猪！ それは至極よろしい、その猪を売ってくれんか」

「お売り申してもよろしゅうございます」

「よしよし、それでは買おう、鍋もそのままにして、味噌か醤油もあるであろうな」

「エエ、ただいま出して上げまする」

思わぬところで意外の御馳走。一行は炉の周囲をかこんで小舎いっばいに拡がって、

「猪の肉とは有難い—— 獵師、もっと大きな鍋はないか」
「へえ、こちらにございます」

惣太は、いま炉にかけてあったのより、やや大きい三升焚きぐらいの鍋を押し入の中から引張り出して、それから上り口へ寝かしておいた猪の股のあたりの肉を切りにかかった。

「大きなやつだな、この辺には、こんなのがたくさんいるか」

「へえ、大分いるにやいますがね、近頃は戦争で鉄砲の音がやかましいものですから、みんな紀州筋へ逃げ込んで、やっと五日もかかって、こいつを一つ仕上げたのでございます」

「そうか、なんにしても有難い、代はいくらでも取らせるぞ、早く料理をしてくれ」

「では、こうして丸切りにして、鍋の中へぶち込んで、ぐつぐつ煮立てて進ぜましょう」

「それがよかろう、よかろう」

惣太はよく働いて猪の肉を煮てやります。気味が悪くてたまらないけれども、ぐずぐず言えば、どんな目に逢うか知れたものでないから、神妙に言われる通りに世話していると、浪士らは寝たり起きたりして肉の煮えるのを待ち構えています。

「おいおい、獵師、黙ってはいかんぞ、ここに有難

いものがある」

磯崎という浪士が、寝ころんでいた自分の枕許で見つけ出したのが貧乏徳利であります。

「やあ、それを見つければたまりませんな」
「何だ、酒か」

それだけは隠しておきたかった。惣太がいま猪の肉を煮ていたのは、実は取って置きその濁酒を一杯やりたかったからであります。肉の方は、いくらでも御用に立てるが、酒の方はかけ換えがないから、それを見つげ出された惣太は苦い面をしました。

「うむ、獵師、人が悪いぞ、これを隠して一人でこっそり飲もうなどは不届きだ……一升はしかと認めた、茶碗を出せ、さあ、おのおの」

肉の煮える間、一升の濁酒は十一人の口を潤おしている。

それを傍で見ている惣太の顔色はない——惣太が、こんな危ない時世に、山奥へわけ入って猛獣を追い廻しているのも、この一升が生命なのであります。

それをみすみす人に飲まれて、自分は指をくわえながら、料理方を承わっている辛さ口惜しさというものは容易なものではないのでした。

「獵師、獵師」

肉の煮えた時分に惣太の姿が見えなくなっていました。

「獵師、どこへ行った」

呼んでみたけれども返事がない、一同は少しばかり怪

しんだけれども、さして気にも留めず、それから寄つてたかつて猪の肉を突く。

「獵師はどこへ行つた」

「逃げたかな」

「逃げたようじゃ、逃げて訴人でもしおると大事じゃ」

「いいや、訴人したとて恐るるに足らん、藤堂の番所までは六里もあるだろう、ゆるゆる腹を拵えて出立する暇は充分」

「よし十人二十人の討手が向うたからとて、かくの如く兵糧さえ充分なら、何の怖るることはない」

「とかく戦というものは、腹が減つてはいかん」

「古いけれども、それが動かざる道理」

「それにしても、中山侍従殿には首尾よく目的のところへお落ちなされたかな」

「こころもとないことじゃ」

「十津川を脱けて、あの釈迦ヶ岳の裏手から間道を通り、吉野川の上流にあたる和田村というに泊つたのが十九日の夜であつた」

「その通り」

「中山殿はじめ、松本奎堂、藤本鉄石、吉村寅太郎の領袖は、あれから宿駕籠で驚家村まで行つた、それから伊勢路へ走ると先触れを出しておいて、不意に浪花へ行く策略であつたがな」

「彦根の間者が早くもそれと嗅ぎつけて、大軍でおつ取り困んだ——吉村殿と、安積五郎殿が一手を指揮して後方の敵に向うている間に、藤本、松本の両総裁が前面の

敵を斬り開いて、中山卿を守護してあの場を落ち延びたが、さて危ないことであつた」

「そこを落ち延びると、忽ち紀州勢が現われて藤本殿はあわれ斬死じゃ。悼ましいことではあるが、その働きぶりは、さながら鬼神のすがたであつた」

「その日の夕暮、またも行手に大敵が現われて、松本総裁は牧岡氏と池氏とに後を托して、中山卿を守りて長州へ落ちよと申し含めて、自身は大敵の中で見事な切死」

「さてさて、天命是非もなし、我々こうして永らえているも、一に中山卿の安否が知りたいため」

「それも、どうやら望みが絶えたわい——」

このなかでは最も重い、組の監察をしていた酒井賢二郎が言い出でた一語は沈痛に響きました。それは絶望の叫びであつて同時に覚悟の決定を促すように聞えたから、一同は暫らく無言で酒井の面を見ていると、酒井は、

「それに比べては僭越であるが、建武の昔、楠正成卿が刀折れ矢尽きて後、湊川のほとりなる水車小舎に一族郎党と膝を交えて、七生までと忠義を誓われたその有様がどうやら、この場の風情と似ているではないか」

「いかにも……」

「もはや、いずこへ落ちたとして袋の鼠、飢え疲れて名もなき者の手にかかり、縄目の恥なんどに遇うて、先輩や同志の名を汚すはこの上もなき不本意、こころで落着いて、武士らしい最期を遂げようではないか」

「尤も……」

一同は更に異存がない、異存らしい面色もない。死す

べきところに死ななければ、死せざるに勝る恥があるといふことの分別はいずれも人後に落ちないものであったから、彼等は死を争おうとも、それに異議を唱うるものが一人もあるべきはずがない。一座が無言にして沈黙の重きに圧されたのは、潔き同意の表白であったから、言出した酒井賢二郎も満足して、

「御同意で忝ない。ただし、これは強いては申さぬこと、なおまた万死を賭して中山殿の御跡をお慕い申してみたい者は、そのようになさるがよい、国に残る妻子眷族のことが気にかかるものあらば、それもまたお心任せ」

酒井賢二郎は一同を見渡して念を押すと、静まり返った中から、

「いかにも酒井氏の申さるること、道理至極、死すべき時に死せざれば死するに勝る恥がある。今はとても中山殿のお跡を慕うこともなり難し、いわんやまた、いまさらには妻子眷族に未練を残す者もあるまい、ここで腹を切るが最上の武士道と存ずる」

水野善之助というのがこう申し出でる。自然これが一同の意志を遺憾なく代表したことになった時に、

「拙者一人だけは——」

ヒヤリと剃刀で撫でたような言葉。それはさきほどから隅の方に黙々としていた机竜之助の声でしたから、一同の眼先は箭を合せたように竜之助の面に注ぐと、

「切腹は御免を蒙る——」

「何と言わしやる」

「拙者は、まだここで死にたくないから、一人でありとも生き残って落ちてみるつもりじゃ」

「死にたくない？」

浪士たちの眼から電が発するようですけれど、竜之助の眼は少しく冴えているばかりで、その面は例の通り蒼白い。

「ふーん、死に怯れたな」

ほかの浪士は、憤激と輕蔑の眼を合せて竜之助を見る。「拙者は死にたくない」

竜之助は冷やかなもの。

「忠義を忘れたか！」

忘れるにも、忘れないにも、竜之助には忠義の心などはないのです。前に申す通り、幕府を助けたいとか朝廷に尽すとかということとは、少しも竜之助の胸には響かなかつたのです。今、どこへ行っても諸国の浪士が勤王佐幕勤王佐幕で騒いでいるのがばかばかしくてたまらないのでありました。忠義のために腹を切る——楠正成が最期に似たりと浪士らは血を沸かせている間に、竜之助ばかりはどうしてもそんな気分になれないものと見えま

す。

「机氏」

酒井賢二郎は逸る他の連中を抑え、「貴殿一人は死にたくないと言われる、もとより強いて死を求むるものではない、しからばこれより落ちるなり、逃げるなり、お心任せになさるがよい、さてその他の諸君」

酒井はまた一座を見廻して、

「申し遺すことなどもあらば、最後の思い出に書き給え」
彼等は紙と矢立を持っていました。

もはや、机竜之助の方は誰も相手にしなかった。竜之助が、こんなふうにつむじ曲りの人間であることは、この連中がもうよく呑込んでいるものと見えて、一旦は憤激してみたけれど、今は取合いませんでした。

竜之助は黙って、自分だけは遺書もしなければ辞世もつくらず、介錯をしてやろうとも言わず、もとより頼もうと言う者もありませんでした。

そのうちに、余の十人は、それぞれ辞世の詩歌、妻子へ申し遺すことなどを書いてしまいました。

水野善之助は、二の腕の創をよく結び直しながら、
「宮の御鎧に立つ所の矢七筋、御頼先二の御腕二箇所突かれさせ給ひて、血の流ること滝の如し」

朗々と太平記を口ずさむ、それを荷田重吉が引受けて、

「然れども立ちたる矢をも抜き給はず、流るる血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相模、四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫いて宮の御前に畏り……」

木村清太郎は長い刀を抜いてそこへ跳り出でて、
「戈鋌剣戟を降らすこと電光の如くなり、盤石岩をとばすこと春の雨に同じ、然りとはいへども天帝の身には近づかぬ、修羅かれがために破らると……」
大塔宮の昔をしのぶにはちようどよい土地である。

あの時分以来、この十津川郷には南朝忠臣の靈気が残っているはずであります。

二

獵師の惣太は、薪を取りに出るふりをしてこの小舎を逃げ出してしまいました。

十津川の岸へ出て一散に北へと走せ下る。

「やれやれ怖ろしいことじゃ、命拾いをしたようなもの。しかしこうなってみると、怖いところにまた有難いことがある、あれを藤堂様なり紀州様なりに訴人をすれば、莫大な御褒美にありつける、占め占め」

もう安心と思った時分に、惣太は汗を拭きながら独言を言いました。それでも足の方は休ませずに、なおも流れに沿うて急ぎ下ると忽ち行手で人声がする。

「や、また来やがったぞ、待てよ、敵か味方か、ここへひとつ隠れて様子を見てやれ」

岩と木立の間へ惣太は素早く身をひそめると、流れを上ってこちらへ来るのは、都合十人ほどの武士であつて、その服装のいかめしいのを見ても落武者でないことは確かです。

「宇津木氏、その机竜之助とやらは、日頃この天誅組の一味に気脈を通じていたような形跡がありましたかな」
「いや左様なことはありません、聞けば江戸へ下る途中、伊賀の上野にて、これらの浪士の一行に加わり、それより吉野へ出で、いったん浪花へ入って、それからまた出

直してこの旗上げに加わったように見えます」

一行の中の大将分と見えるのと話をしているのは宇津木兵馬でありました。

藤堂の討手^{うって}で藤井新八郎というのがこの大将分で、兵馬はその手に加わって、今この山奥深くたずね入り来^{きた}たのは、たしかに驚家口から逃れた一隊の浪士の中に机竜之助がいると見定めたからであります。藤井新八郎は領^{うなず}いて、

「この山中へ追い込めばもはや袋の鼠である、いずれへ行っても紀州領、帰れば我々の追手が十重^{とえ}二十重^{たえ}、山中に永く迷いおれば食糧はなし」

こういったような話をしてこの一隊が、心して川の岸を進んで行った時に、

「申し上げます、もしあなた様方は紀州様でございますか、藤堂様でございますか、申し上げます」

岩蔭から転^{ころ}がり出した獵師の惣太。一行は屹^{きつ}と足をとどめて、従卒は鉄砲の筒を向けてみましたが、用心するほどの者ではない、賤^{いや}しげな木樵^{きせり}山がつの類^{たぐい}がたった一人。

「その方は何者じゃ」

「獵師でございます、惣太という獵師でございますが、ただいま悪者を見つけましたから御注進申し上げます、ただいま、私共の山小舎^{やまこや}へ都合十一人の浪人者が舞い込みましたのでございます」

「ナニ、十一人の浪人？」

「ええ、ただいま、酒を呑み、肉を食って休んでおりま

す」

「よく訴人した、案内せよ」

惣太を先に打立たせ、やがてその山小舎のあたりへ来た時分に、前後の様子を篤^{とく}と見定めた藤井新八郎は、

「惣太」

「へえ」

「気の毒だが、その方の小舎へ火をつけてくれまいか」

「焼くのでございますか」

「そうじゃ、あとで不服のないように普請^{ふしん}をして取らせる」

「よろしゅうございます、焼きましょう」

「しからば、これを持って行け」

新八郎は、腰にさげたやや重味のある袋を出して惣太に取らせる。

「これは何でございます」

「それは火薬である、その方はそれを持って、なにげなき体^{てい}で小舎へ帰れ、気取^{けと}られぬように、小舎を締め切つて程よいところから火を出せ、その火を合図に我々が取囲んで、一人も残さず搦^{から}め取る」

「よろしゅうございます、やってみましょう、ずいぶんあぶない仕事ですが、なあに、やってやれないことはござんすまい」

落武者は十一人と数が知れても、それが死物狂^{しにものぐる}いに荒^{あば}れる時は危険の程度が測られない、新八郎が惣太に火薬を授けたのは、その辺の遠慮から出た計画と見える。

藤堂方の討手は小舎を遠巻きにしていると、惣太は心

得て、火薬袋を腰にぶらさげて小舎へ戻って来たが、このとき、小舎の中はもう薄暗い。

「皆様方、帰って参りました」

戸をあけて中へ入ると、

「おお、獵師、どこへ行っていた」

「はい、米が切れたから里へ取りに参りました」

浪士らは、深くも惣太を怪しまぬようでした。惣太はおそるおそる炉の傍へ寄って、

「今、米を炊いて上げましょうぞ、なんしろ鍋が二つしかございませんから、こいつを洗って、これでお米を炊くと致しましょう」

いま猪の肉を煮ていた鍋を惣太は取り下ろして、提げ出そうとする途端に、腰に下げていた、さつき新八郎から授けられた火薬袋の紐が解けて火薬はドサリとそこへ落ちました。

「獵師、何か落ちたぞ」

「へえ……」

惣太の唇の色が変わってしまします、鍋を持った手がワナワナと顫えます。

「これはその……」

鍋を下に置いて、あわててそれを拾い取ろうとする挙動があまりに仰山なので、荷田重吉が不審に堪えず、

「それは何だ」

「これは——ゴウヤクでございます」

「ゴウヤクとは何だ」

「何でもございませぬ」

拾い取ろうとする惣太の手首を荷田が押えて、

「ちよつと見せてくれ」

「ええ……御冗談」

「貴様、まだ何か隠しているな、ゴウヤクとは何だ、出して見せろ」

荷田も、これが火薬袋とは知らないが、惣太の挙動があまり仰山なので、ついついそれを取ってみる気になると、惣太は面の色を失って荷田の手を押し払って、それを拾い取って懐中へ捻じ込もうとしますから、いよいよ嫌疑が深くなるわけです。

「こりや獵師、貴様はただいまどこへ行つた」

「里へ米を買いに」

「黙れ、この近いところに米を売るようなところはない、貴様は訴人に出かけたな、我々の所在を敵の討手へ知らせに行つたのであろう」

「ど、どう致しまして」

「その袋が、いよいよ以て怪しい」

荷田は力を極めて袋を引つたくる、惣太は力任せにそれをやるまじとする、その途端にころがり出したのが炭団ほどな火薬二個。

「やあ、これは火薬じゃ」

「おのれ！」

一人の浪士は抜打ちに惣太を斬ろうとする。惣太は絶体絶命で、眼の前に転がって来た火薬を一つ掴むや否や、燃え立っていた炉の中へスポツと抛り込みました。

轟然たる爆発。鍋は飛び、炉は砕け、山小屋は寸裂す

る、十一人のうち、一人即死。面を半分焼け焦されたの、手の肉をもぎ取られたの、全身に大火傷をしたの。肉が飛び血が流れ、唸き苦しんで這い廻る上に火がメラメラと燃え上りました。

「ソレ合図だ」

遠巻きにしていた藤堂の討手は、意外に早く火があがったのを怪しみながら走せつける。

この場で即死した二人のほか、焼け爛れて歩行の自由を失い、藤堂の手で搦められたものが一人、あり合う俵や菰を引つかぶって逃げ出し、折からの闇に紛れて行方知れずになったものが七人。

しかし、このうち六人はその翌日、紀州方面へ逃げて行くところを、紀州勢の見廻りに出会って山の中でつかまってしまいました。

十一人のうち、十人まではこんなことで運命が定まったに拘らず、どうなったかわからないのがたった一人、それがすなわち机竜之助でありました。

三

紀伊の国、竜神村の温泉場で今宵は烈しく犬が吠えます。

山村とは言いながら、客には慣れたはずのこの里で、こんなに犬の吠えるのは珍しいことです。

時はもう秋に入るのであるから、爽かなるはずであるべき天候が、まだなんとなく雲を持って、桶の底のよ

うなこの土地を、ひたひたと上から押してくるようなので、湯の客人もなんだか、近いうちに暴風雨でもなければよいがと言っていました。

犬も、それを心配して空に向って徒らに吠えているのかとも思われます。

「犬が吠えていますなあ」

「そうでございます、よく吠えますなあ」

上方の客と見える頭の禿げた隠居と、和歌山あたりの商人と見えるのと、二人で湯槽の中で話していました。

竜神村は、日高川の源、山と山との間、東西二里、南北五里がほどに二三十町ずつを隔てて、八力所に家がある。その八力所のうちのここは湯本といって、温泉宿が今では十九軒もある。その十九軒のうちの室町屋というのが、この家でありました。

もう少したつと客がドツと多くなるが、今のところは、夏と秋との移り変りであるのと、近国に戦乱があるのと、そんなこんなであまり客はないのです。

「まだ吠えてますなあ」

「あちらでも、こちらでも、吠え立っておるわい、どうしたもののじゃろう」

二人の客は湯槽から這い上って、隠居の方は軽石で踵をこすりながら、

「何か、悪い獣が山から出てうせはせんかな、狼か、山犬か、猪かむじなか」

「近頃は、トンと左様な噂も聞きませぬ。なんにしても、こう吠えられては物騒でなりません」

二人が犬の吠えるのを頻りに気にしていると、浴室の戸をガタと開いて、一人の女中が面を出し、

「もし、お客様、恐れ入りますが、急にお湯をお上りなすってくださいまし、あの、お調べのお役人が参りましたから」

「ナニ、お調べのお役人が——」

二人は面を見合せて、

「わしらは、別に調べられるような筋はごわせんが……」

湯から上って、もう寝ようとする今時分に事改めて、調べの役人が向うなどは、今までに例のないことで気味の悪い話です。二人は面を見合せて、

「何でござすな、いったいお調べというは」

「はい、あの十津川筋とやらから、こちらへ悪者が落ちて参りましたそうで、それがため夜中のお調べでございます」

「ああ、天誅組の落人か」

犬の遠吠えもそれでわかった。

この晩、調べに来た役人というのは仰々しいものでありました。いずれも物の具に身を固めた兵士で、十津川から来たものと、紀州家の兵とが一緒になって、竜神村へ逃げ込んだ天誅組の余類を探そうというのであります。

それがために、温泉宿とお客とは大迷惑で、入浴中を引き出されたり寝込みを叩き起されたり——それが引取ってしまうと、大風の吹いたあとのように、胸を撫で卸

しながら床について、やがて、犬の吠えるのも静まり返った時分のことであります。室町屋の帳場で帳合をしていたこの家の若い女房——まだ眉を落さないが、よく見れば、それは、二月ほど前に、初瀬河原から藍玉屋の金蔵につれられて逃げたお豊であることは意外のようで、実は意外でも何でもありません。してみれば、ここはいつぞや金蔵が話した通り、その親たちがはじめた温泉宿である。金蔵は今も見えないし、役人の来た時もある来なかつたから、たぶん不在なのであります。

お豊がこうして帳場へ納まっているからには、もう相場がきまつたものと見てよろしい——お豊は帳合をしてしまつたと、行燈の火影に疲れた眼をやつて、ホツと息をつきました。すぐにまた帳場のわきへ置いた人相書に眼がつかます。さきの役人が置いて行った人相書——もし、これに似た客が来たら遠慮なく申し出でろ、人違いで咎めはないが、届けを怠ると重い罪だと厳しく申し渡されたものであります。ざつと見て捨てておいたのを、仕事に済んで、また取り上げて、はじめから読んでみます。

「年齢三十三四——」

瘦形の方、身の丈尋常、

顔色蒼白く、

鼻筋通り、

眼は長く切れて……白き光あり……」

お豊はハツとしたのでありましたが、

「甲源一刀流の達人——」

「あ！」

人相書を持った手が顫えたようでした。が、さきに飛ばして読んだ名前のところへ、ひたと眼が舞いもどる。

「元新撰組——机竜之助」

机竜之助……これでよかった。違う。しかし気にかかるとは竜という文字……お豊の胸には急に熱鉄が流れるのでありました。

また犬が吠えて、この家の前で足音が止まる。

いま締めたばかりの表の戸をトントンと叩いて、

「もしもし、室町屋さん」

「はい」

お豊は返事をする。

「済みません、夜更けになって」

殿貝とのがいというこの温泉村の世話役の声でありますから、

「ただいまあけますから」

あいにく誰もいなかったから、お豊が立って戸をあけると、殿貝老人が提灯ちようちんをつけて入って来て、

「今晚は、どうもはや、度々お騒がせ申してお気の毒だが、お内儀かみさん、このお方のお宿をひとつ」

後ろを顧みて老人は、

「十津川からお越しのお武家様でござります」

お豊は愛想あいそよく、

「はい、よろしゅうございますとも、どうぞこれへ」

「さあ、お武家様、どうぞこれへお入り下さいまして」

老人が丁寧に案内すると、

「御免」

と言って入って来たのは、太刀を横たえ、陣羽織をつけた敵めしい身ごしらえですけれども、歳はまだよほど若いように見えます。

「あの、これは藤堂様の御家中ごちゆうでな、どうか御粗相ごそそうのないうように」

「見苦しいところでございまして、それにこんな山家やまがのことでございますから行届き兼ねますが、どうぞごゆっくりお泊りを願います……お鶴や、お鶴さん」

お豊は入って来た武士のために敷物を取ってすすめながら、女中を呼び、

「お洗足すすぎを差上げ申して、それからあの、お食事を」

「いや、食事はもう済みました、湯に入れてもらい、直ぐに休むと致しましょう」

若い武士は上り端あがに腰かけて草鞋わらじの紐を解く。

「お内儀かみさん、金蔵どのはまだ帰らぬかな、えらい永逗留ながとまりじゃ」

「まだ二三日は、帰るまいと思われますのでございます」

「そうか。なにしろ近国では、あのような騒ぎ故、早く帰ってくれないと困る」

「左様でござります」

「では、お頼み申しましたよ。それから、あのな、御如才ごしよさいもあるまいが、先刻さつきの人相書、あれはよくよく気をつけてな、何の遠慮はいらぬから、怪しいのが見えたら、早速、わしがところなり組合の衆なりへ申し出てもらいたい……いや、こちらのこのお武家様に直接じかに申し上げてもよろしい、頼みましたぞよ」

「ええもう、委細承知致しました」

この時、若い侍は草鞋を解き足を洗い終る。

「さあ、どうぞ、これへ」

お豊は、さきに立って案内する時、いままでは蔭であった行燈の光でよく見れば、まだ前髪立ちの少年で、これは申すまでもなく宇津木兵馬でありますけれど、お豊は、まだこの人には近づきがなかったのであります。

四

温泉寺の鐘が九ツを打つ。

兵馬は、いま枕について、まず頭にうつるものは、いま自分を案内してくれたこの宿屋の若い女房のことでありました。思いなしか、自分がいったん姉と慕ったお浜の面ざしにそっくりです。お浜は憎むべき女である。兄の身にとっては、竜之助よりはお浜の方がいっそう罪が重いかも知れぬ——竜之助を憎む兵馬には、お浜はなお悪いものでなければならぬはずですが、兵馬にはそれが心から憎くなれないのです。故郷へ帰った時は、よく世話をしてくれて、江戸にいる時は着物を送ってくれたり、土地のみやげを送ってくれたり、よく修行してえらい人になってくれと励ましてくれたこともある。芝の松原で、惨たらしい殺され方を見た時、その遺書を繰返して見た時、不貞の女の当然の報いを眼前に見せられても、なおその女が憎いとは兵馬には思えないで、やっぱり親切な姉の気持が離れないのであります。

兄の無念を思いやって、齒を咬み鳴らす時も、嫂の面影は、やっぱり優しい人にうつる。竜之助を憎み悪む心が火のように燃えても、お浜を慕わしく哀れに思う心は消えないのです。

兵馬は純良な少年である——まだ世の塵にけがれない真白い頭へうつつた優しい人の影は、消して消せない、あんな気立てのよい姉上が、なんと心が狂って、竜之助のような奴に欺されたことだ。

取返しがつかない、悔やんでも及ばない。兵馬は、これが浅ましくてたまらないのです。憎い者の罪は憎めるけれど、憎めない者の犯した罪はどう憎んでよいかわからぬ。兵馬は常にお浜のために泣きたくなるのです。かえってその人のために泣きたくなるのです。

兵馬には、女の心の浅まさがわからない。けれども要するに、自分の身の廻りの言わん方なき苦しき紛紜は、一にお浜の心から来ていると、思えば思えるのである。人の一念こそ真に怖るべし、ちよつとした心の狂いは、無限に糸を引いて、それからそれとからみつくものである、その人が亡くなったとて、その一念の糸はなくなるものでない。

今、自分の枕元へ丸い行燈を据えて、燈心を程よく掻きなして行ってくれたこの宿の若い女房の姿を思い浮べると、胸から乳へかけて真白な肌に血のかたまりが！ そんなものがあるわけではないが、兵馬は、あの芝の松原の、お浜の酷い殺され方を思いやって身の毛が竦つのであります。

竜神村の夜は静かで、犬も煩惱ぼんのうを忘れて眠るのに、兵馬は思いに募つることばかり。

お豊は兵馬を二階の座敷へ案内して、廊下を渡って来ました。が、かの人相書にんさうがのことがどうも気になってならぬ。帰りがけに、梯子はしこわきの戸締りがほんとうでないから、ちよつと手をかけてみたが容易たやすくは動かないので、一旦あけ直して見ると、眼の下は、夜に眠る温泉村。

夜更けての温泉村の風景は、土地に住み慣れた人をさえうつとりさせる。今は草木も眠る丑三時うしみつどき、竜神八所に立籠めた水蒸気はうすものの精が迷うているようであります。

なんの気もなく空を見れば、鉾尖ほこさきヶ岳たけと白馬しらまヶ岳たけとの間に、やや赤味を帯びた雲が一流れ、切れてはつづき、つづいては切れて、ほかの大空はいっぱい金砂子きんすなごを蒔まいた星の夜でありました。

東から西に流れる雲、或いは西から東へ流れる雲。それが細長くつづきさえすれば、赤であつても、白であつても、ほかのどんな色でも、色合いにはかまわず、土地の人は一体にそれを「清姫きよひめの帯」と呼びます。

いま、お豊おとよが見たのも、その「清姫きよひめの帯」であつて、牟婁郡むろごおりから来て有田郡ありたごおりの方へ流れているのであります。

お豊は、この土地へ来て、「清姫の帯」を見るのはこれがはじめてですから、ただ、まあ珍らしく細長い雲と思つたばかりですけれども、もしこの土地に永く住み慣れた人ならば、面かほの色を変えて、戸を立て切り、明朝あすとも言わずに竜神の社へ駈かけつけて、祈きたうと護摩ごまとを頼む

に相違ないのであります。

ことに、東、鉾尖ほこさきヶ岳たけから、西、白馬しらまヶ岳たけまでつづく「清姫の帯」は、土地の人にいちばん怖おそれられています。

三年に一度あるか、五年に一度あるか、とにかく、「清姫の帯」が現われることはあつても、この二つの山までつづくということは滅多めったになく、もしそれがあつた日には、土地の人は総出で竜神の社へ集まり、お祓はらいをし、物忌ものいみをし、重い謹慎きんしんをして畏おそれる。最初にそれを見つけた人は、その歳のうちに生命いのちにかかわる災難さいなんがあるのだということでありました。

今、土地の人はみんな眠っている。おそらくこれを見たのは、お豊一人であろう——お豊の、そんな言い伝えを知らないことは、この村の今夜のためには平和である。しかし実際は、同じ夜の同じ時に、この怪しい雲を見た者が、この竜神村においてお豊のほかに、まだ一人あるにはあつたのであります。

その晩、お豊のほかに「清姫の帯」を見たものというのほ、ほかではない、この竜神の社に籠かこむ修験者しゆげんじやでありました。

この修験者は、三年ほど前から、ここへ来ていました。それがお豊と同じ時刻に水を浴びて、護摩壇ごまだんへ戻る時に、ちようど、この「清姫の帯」を見たのであります。

竜神の社があるところは、お豊のいる温泉場よりずっと高い——修験者は雲の起るところから終るところを仔細しさいにながめて、その雲がいずれへ流れていずれで消え

るかをまでよく見ておいて、それから眼の下に群がる竜神の温泉場を見下ろしたのであります。

日高川の源みなもとが社の下を蛇うねって流れて、村の谷間たにあいをかかれて行く。小半時も村の方を見下ろしていたが、村では別に誰も騒ぐものがない。それで、修験者は扉をあけて社の中へ入ってしまいます。お豊は、もうずっと前に戸を締めてしまいました。

修験者が扉をあけて社の中へ身を隠してしまつた時分には「清姫の帯」は全く消えて、わずかに切れぎれになつた笠ほどのが三つばかり、白馬ヶ岳の上あたりに漂ただようのみでした。

仮りにこの「清姫の帯」を、お豊でないほかの村の人が見たことならば、それこそ大騒ぎで、さきの修験者が小半時も村の方を見下ろしていた時分に、ほとんど総出で、この社へつめかけて来ねばならぬはずのところを、今まで来ないくらいだから、誰も見た者はないにきまつています。

そうすれば、誰も知らない間に、怖ろしい災禍わざわいがこの竜神村を襲うて来るに違いない。その災禍の来ない前に、その災禍を鎮める力のあるように信ぜられてゐるのは、この竜神の社の修験者であります。

修験者は、村の人に頼まれるれば、村の人のためにあらたかな修法しゅほうをして、風か雨か、火か水か、とにかく、来るべき災禍を鎮めてやるに違いないのだけれど、困つたことには、いくら修験者にその力があつても、それを最初に見た村の人から頼みに来なければその法のききめが

ないということでありました。

さあ、伝説が真実であつたら、この村の頭の上に大悪魔が手を出しているわけであります。それを知っているのは修験者一人、知って知らないのはお豊一人——修験者は天地が八つ裂きになろうとも自分からこうとは言い出さぬ。いまや竜神村の安否はお豊の口一つにかかつてゐるはずなのに、そのお豊は怖ろしい言い伝えの前には無智であるだけに、それだけに大胆でありました。「清姫の帯」は念頭になく、ただ人相書が気になつて眠れないのであります。

五

その次の日の宵の口、室町屋の店先には、竜神街道や蟻腰ありこしこ越えをする馬子まご駕丁かぢかきと、それに村の人などが、二三人集まつて声高く話をしてゐます。

「今年も、よくよく御難ごなんな年だ、十津川騒動さえ始まらなければ、こんなことはないのだが、湯の客は少ないし、薬種やくしゆを買いに来る商人も見えず、その上に、今日も明日も厳きびしい落人詮議おちうとせんぎで追ひ廻される、たまつたことじゃないわ」

全くその通りで、十津川騒動の余波を受けた竜神温泉の不景気たらない。

温泉のほか、この土地では薬種が採れる、瓜うりの根から粉がとれる、名物の檜ひのき笠かさと白箸しろはしとは土地の有力なる物産である、それから山で茸類たけのこがとれる——温泉とこれ

らの産物によって土地の人は活計を立てているのであり
ました。戦乱のために湯の客が少なくなっても、直ちに
生活にさしひびくというようなことはないが、弱らされ
るのは天誅組の余類が、この竜神村のどこかに隠れてい
るといふ嫌疑で、昨夜から引続いて、探索のあることで
あります。

世話役は引っぱり出され、人足は駆り出され、宿屋宿
屋には厳しいお触れがある——馬子や駕丁もうっかり客
を載せられぬ。

「ねえ、お内儀さん、こちらにおいでなさる、藤堂様の
御家中だとかおっしゃるお若いお方は、まだお帰りにな
りますまいね」

これは檜笠ひのきがさづく作りの六助で、店にいたお豊を見て問
かけたのであります。

「ええ、朝早くおでかけになったきり……」

「殿貝の旦那から聞くと、こちらへお泊りになった若い
お侍は、あれは敵かたきをさがしにおいでなすったんだとさ」

「敵を？」

「そうですよ、親の仇かたきが天誅組から逃げて、たしかに
この竜神村へ入り込んだといって探しにおいでなすった
んだとさ」

「はあ、親の敵、なるほど。まだお若いに豪えらいものじゃ
な」

「豪いものじゃ。早く見つけ出して、立派に討たせて上
げたいものじゃな」

「なるほど、十津川からこの竜神へは、落ちて来そうな

ところじゃ。しかし竜神といっても、人家はこれ僅かな
ものにしてからが、あの山、この谷をさがすとしたら容
易なものじゃあるまい」

「まあ、当分は御用心のことじゃ。落人じゃとて一人に
限ったものでもあるまい、どこにどんな人が幾人かくれ
ていることか、なんにしても今年は災難な年じゃ」

「でもまあ、よく『清姫の帯』がお出ましにならないこ
とよ」

「左様さ、これで清姫様の帯でもお出ましになったら、
それこそ竜神村の世の終りだ」

「左様でござんすなあ、清姫様の帯も、もうここ五年が
ところもお出ましにならぬが、なにぶんにも、このまま
で無事に済んで下さればなあ」

「いや、もう大丈夫ですよ、清姫様の帯が出るのは、お
おかた夏にきまってますからな、もう早や秋の分だから
心配はない」

「そうでがすなあ」

しきりに「清姫の帯」、「清姫の帯」という。それが
帳場にいたお豊の耳へは妙にひっかかって、今までの無
駄話のように聞き捨てておけない気持になりました。

「あの、皆さん」

お豊は帳場の方から言葉をかけて、

「何でございます、その清姫様の帯と申しますのは」

集まっていた無駄話の連中は、一斉にお豊の方を向い
て、

「清姫様の帯とは何だとお聞きなさる……なるほど、お

前様はこの土地ツ子では無え」

六助はいま更^{あらた}めて、お豊が他国人、ついこのごろ来た人であるかのように合^{がてん}点して、

「それでこそ、そうお聞きなされるも無理はない。清姫様というのはね、それ、能狂言にある道成寺……安珍清姫というあの清姫までございますよ」

「ああ、そうでございますか」

その清姫ならば、どんな他国者でも大^{たい}抵^{いてい}は知っている、それはずっと昔のこと。その帯がどうしたとか、こうしたとか、それがわからないことです。

「その清姫様の帯が、どうしたのでございます」

六助は話し好きです。今日は人足に駆^かり立^たてられて半日をつぶし、エエあとの半日もつぶしてしまえと、ここで無駄話をしていくくらいですから、お豊から因^{いん}縁^{えん}を問^とわれてみれば渡りに舟で、

「それは、こういうわけなんでございますよ」

六助は煙^ま管^{せる}の皿を掃除にかかった。

「ようございますか、お内儀^{かみ}さん……お前^{まへ}さんは江州^{ごうしゅう}生^{うま}れとかおっしゃったな。江州女^{ごうしゅうにょ}のことは存^{ぞん}じませんが、この紀州^{きしゅう}の女^{にょ}というものは、なかなかその、執^{しゅう}念^{ねん}の強^{かち}いものでございますよ」

「まあ、それは怖^{こわ}いことでございます」

六助が、あまり力を入れて話すので、お豊は少し笑いかけると、

「いや、笑い事じゃござんせん、全く以て昔から今まで紀州の女は、執念^{しゅうねん}深いで評判^{へいぱん}じゃ、いったん思い込むと、

それ鬼^{おに}になった、蛇^{へび}になった」

六助は額^{ひたい}のところへ指を出して、蛇^{へび}になった恰^{かつ}好^{こう}をして見^みせますから、なおおかしいので、お豊は、

「ホホ、それでは紀州の娘^{むすめ}さんは、お女房^{かみ}さんには持^もてませんね」

「それは男の出様次第^{でい}さ、なんでもかでも蛇^{へび}になるというわけではございませんよ」

「そうでしょうとも、そういちいち鬼^{おに}になったり蛇^{へび}になつたりされてはたまりませぬね」

「そうとも、そうとも、みんな男の出様次第^{でい}なんだよ。つまり、そのくらい執念^{しゅうねん}が強い^{つよ}い^いのだから、可愛^{かわい}がられると、また無茶苦茶^{むちゃくちや}に可愛^{かわい}がられる」

「それも危^{あや}のうございませぬ」

「ナニ、この危^{あや}ない方は、ずいぶん危^{あや}なくなつてもよろしいのでございます」

「ハハ、わしらもそんな危^{あや}ない目に遭^あつてみたい」

聞^きいていたものは一度に笑^{わら}い出したが、六助だけは大^{おほ}まじめ、

「笑^{わら}っちゃいけない、大事^{だいじ}のことだ、つまり男の出様^{でい}一つで、鬼^{おに}にもなれば蛇^{へび}にもなる」

六助の話^{わたり}しぶりで一座に花^{はな}が咲^さいたので、六助も得意^{とくい}です。

「お内儀^{かみ}さん、お前^{まへ}さんの前^{まへ}だが、女^{にょ}というものは受^う身^みで、男と比^ひべたら一枚も二枚も割^{わり}が悪い」

「さようでございます」

「女^{にょ}に欺^たまされる野郎^{やろう}が多いか、女^{にょ}を欺^たす男^{おとこ}が多いか、そ

ようやく話は本問題に入るのである。

「まず——紀州牟婁郡真砂の里に清次の庄司という方がおありなすったと思召せ」

「なるほど」

六助の物語に拍子を入れるのは、例の駕丁の松であります。

「その庄司のお嬢様を清姫という——一説にはお嬢様ではない、まだ水々しい若い綺麗な後家さんであつたとも申します」

「お嬢様と後家さんでは少し違う」

「なにしろ、人皇第六十代醍醐天皇様の御世の出来事だから、人別のところ少しの狂いはあるかも知れないけれども、どっちにしても綺麗な女の方に間違いはない。さてここに、鞍馬寺の山伏で安珍というのがあつた」

「安珍——清姫」

「その安珍がまた、山伏のくせにばかに好い男なのだ、そうして熊野参詣の道すがら、清姫様のところで一夜の宿を借りたと思いなさい」

「それが間違いのもとだ」

「清姫様が、スツカリこの安珍殿に打込んでしまいなすつた。さあ、そこが紀州女の執念で、食いついたら放すことじゃない」

「やれやれ」

「ところが、その安珍殿というのが、この上なしの野暮で、一向お感じがない、感じないわけでもあるまいが、そこは信心堅固の山伏だ、仏法の手前があるから逃げる、

姫様は離れない、寝るから起きるまで、食付き通して離れない」

「それは大変だ」

「そこで、安珍殿も弱りきって、ぜひなく、清姫様を諭して言うことには、わしはこれから熊野権現へ行く身だから穢れてはならぬ、その代り帰りには、きつとお前の望みを叶えて上げるから、日数を数えて待っていて下さいと」

「なるほど」

「そうしておいて安珍殿は熊野へ参詣を済まし、その帰りには、この家の前を笠で面を隠して、素早く通りぬけてしまった」

「泊ればよかつたに」

「清姫様は陰膳を据えて待ちに待ち焦れておいでなさるが、日限がたつても安珍殿の姿が見えない、気が気ではない、門前を通る熊野帰りの旅僧にたずねてみると、その人ならば、もう二日も前にここを通り過ぎたはずだと教えられて髪の毛がニューツと逆さに立つた」

「うむ、うむ」

「角が二本……雪の膚にはみるみる鱗が生えて、丹花の唇は耳まで裂けた」

「鬼になった、蛇になった」

「角が生えた、毛が生えた」

「そうして、この日高郡をめざして一散に安珍殿を追いかけたものだ」

「なるほど」

「それから安珍殿が、道成寺の大鐘の下へかくされる、追っかけて来た清姫様は、もうこの時は本当の蛇におなりなすった、鐘のまわりをキリキリと巻き上げて、尾でもって鐘を敲くと、炎が燃え上る——寺の坊さんたちは頭をかかえて逃げ出したが、程経て帰って見ると、鐘はもとのままだが、蛇はいない、熱くて鐘の傍へは近寄れない——遠くから鐘を押し倒して見ると、安珍殿はいない、骨もない形もない、ただ灰がちつとばかり残って……」

これで、安珍清姫様の物語のあらすじは一通りわかったから、今度は帯である。

「六助さん、そしてその清姫様の帯というのが、まだどこかに残っているのですか」

「ああ、それぞれ、その清姫さまの帯というのは、それとは全く別の話だ。まあ、いま話したようなことは、能狂言を見たり物の本でも見た人は大概知ってますがね、その清姫の帯というのはこの土地の人に限り、近頃おいでなすったお前さんに、それがわからないのは無理はない」

お豊の聞こうとする本題は、ここまで来てやっと緒が解けた。

「それはね、帯というたとして、金欄や緞子でこしらえた帯ではない、天にある雲のことですよ」

「雲のこと……」

「それだけでは、まだわかりますまいね。なにしろ、それぐらいの執念ですから、この日高川の上、日高郡一帯

には、まだ清姫様の怨霊が残っているのですね」
「怖いことでございます」

「その怨霊が雲になって、この日高郡の空へ現われる、それ、あちらに見える銚尖ヶ岳から、こちらに遠く白馬ヶ岳まで、一筋の雲がずっと長く引いた時は大変だ、それが今いう、清姫様の帯だ」

「まあ、銚尖ヶ岳から、白馬ヶ岳まで……」

「そうそう滅多にそんなことはないがね、五年に一度とか、十年目とかに、それが現われる」

「それが現われると、どうなるのでございます」

「それが現われたら、大変だ、この竜神村一帯に大災難が起る」

「それはホントでございませうか」

「ホントにも嘘にも、昔からの言い伝えで、その時は、村中の御祓い、御祈祷、お慎みをするのだ」

「その雲は夜でも……」

「夜でも昼でも、それが現われたが最後じゃ……それをいちばん初めに見た者が、あの竜神様へお告げ申して、お祈りをする、それを隠してでもいようものなら、その人には、きっと清姫様の怨霊がたたって、生きながら蛇になる」

「そんなことがあるものでしょうか」

「あるかないか、昔からの言い伝えじゃ。お内儀さん、お前さんもこの土地に居着きなさるものなら、よく覚えておおきなさい、銚尖ヶ岳から白馬ヶ岳まで一筋の雲……」

竜神の社の石段は、数えてみると九十八級あります。幅が狭いだけに勾配が急に見える。別に女坂というのではないのですから、お豊はこの石段の上に立って見上げていると、十日ほどの月影が杉の木の間に洩れて、木の下闇では虫が鳴く。

「おや、お豊ではないか」

「まあ、金蔵さん」

金蔵は旅の姿である、今どこからか帰って来たばかりである。そうしてここへ通りかかったものであります。

「お前、一人でどこへ行くのじゃ」

「竜神さまへ参詣に参りました」

「なんと思つて、こんな夜分——まあ信心はどうでもよい、わしと一緒に帰ろう」

「はい……あの」

「お前を喜ばせようと思つて、これこの通り和歌山の御城下から、お土産を買い込んで来たわい、さあ、早く一緒に帰りましょう」

金蔵には恋女房である、この女一人を喜ばさんがためにはどんなことでもする、土産をひろげて女の喜ぶ面を早く見たい。手をとって連れて帰ろうとするのにも無理はない。

「金蔵さん……」

「何だ」

「わたし、この竜神さまへ心願をかけましたから、どうぞ、参詣をさして下さい」

「心願をかけたと……何か願があるのかい、何か不足があるのかい」

「いいえ、そういうわけではありませんけれど、信心ごころが出ました」

「そうかい、せっかくの信心ごころを止めても悪からう。それでは、わしも一緒に行こう、ついでだから、一緒にこの竜神さまへ上つて拜んで行きましょう」

金蔵は何でもお豊の言う通りです。

「けれども金蔵さん、神仏への信心は、ついででは罰が当ります、わたし一人で参りますから」

「なるほど、ついでの信心ごころはよくないかな。それでは、お前の拜むのを傍で見よう。さ、手をお出し、手を引いてこの石段を上らせて上げよう」

金蔵は手をとって、お豊を引き上げてやろうとするのです。

「ようございますよ、わたしは一人で参詣をして参ります、人に助けてもらつては信心になりませぬ」

「それもそうだ。それでは、わしはここで待っていよう。早く、いや、ゆっくりでもよい、お前の思い通り信心をしてくるがよい、夜明けまでも、わしはここで待っている」

金蔵は、旗幟を立てる大きな石の柱の下にうずくまつて、振分けの荷物を膝の上に取り下ろし、お豊の面をさも嬉しそうに見ています。

「そんなら、待っていて下さい、御参詣をして参ります」

お豊は石段をカタカタと踏んで竜神の社へのぼり行く。金蔵は我を忘れて見上げ見惚れていました。

竜神の社には八大竜王のうち、難陀竜王が祀つてあります。

こんな山奥に竜神を祀ることが、奇妙といえは奇妙である——今を去ること幾百年の昔、この地に竜神和泉守という豪族が住んでいた。その屋敷跡は、今もあるというのであります。

竜神の姓はその人以前からあったものか、その人が来て、竜神の社の名によってその姓をつけたものか、その辺はハッキリしません。ハッキリしないところに竜神の秘密がいろいろと附け加えられました。

八大竜王の八という数が、ちょうどこの竜神村の字の数と同じことになる、そうして、この湯本の竜王社には王の中の王たる難陀竜王を祀つてある、野垣内、湯の野、大熊、殿垣内、小森、五百原、高水の七所に、あとの僧鉢羅竜王までが一つずつ潜んでいるということでありました。

天にもし清姫の帯が現われた時は、遠からずこの八つの竜王が、八所の谷から、悉く荒れ出して、雲を呼び雨を降らす——さればこそ竜神の社は、竜神村八所の鎮めの神で、そこに籠る修験者に人間以上の力があり、一村の安否の鍵がそこに預けられてあるように信ぜられているのであります。

お豊は事実、清姫の帯を見た——聞いてみれば怖ろし

いことである。どうやらその怖ろしいものを見たのは、自分一人だけであるらしい。

お豊が今ここへやって来たのは、その修験者に向つて、自分の見たところを逐一白状するつもりであることに疑いはないのです。

修験者のいる所は本社の右手の高い森の中で、そこまではまだ八町ほどある、そこへ行くまでに大師堂を左にと下れば御禊の滝があるのであります。

大した滝ではありません。幅が五寸に高さが二丈もあるか、それが岩の間から落ちて一泓の池となり、池のほとりには弁財天の小さな祠があつて、そのわきの細いところから、こっそりと逃げて水は日高川へ落ちる。この池を御禊の池といつて、椎の木が二本、門柱でもあるかのように前に立つて、それに注連が張り渡してありました。護摩壇へ懺悔に行くものは、きつとこの滝へ来て、まず水垢離をとるのが習わしでありました。

それでお豊は、すぐに修験者のいる護摩壇へは行かないで、その大師堂を左にと御禊の滝まで来かかったわけでありましょう。

月もあるにはある、夜も更けたわけではない。それでも、このところ、この道は決して気味のよいものではない。草叢でガサと音がする、木の間でバサと音がする。お豊は、もう一步も歩けないように足をとめたことが幾度、それでも早や、滝壺に近いところまで来ていました。檜笠作りの六助の口占を引いて、よく聞いておいたこと——懺悔する前には、水垢離の必要が

ある、護摩壇へ行く前には、御禊の池をおとすねばならぬ。

お豊は、その通りにここまで来てみると、もうかなり勇気が出て、注連を張った木に手をおいて、中をのぞぎ込んで四辺を見廻してみました。

人に見られてはいけぬ、人に見せるべきものではない——しかし、そんな心配はてんで無用、ここへは決して人が来ないのである。

お豊は滝の傍へ進んで、かの水が日高川へ逃げて行く弁財天の小さな祠へ来て、その前で手を合せた。それから静かに自分の締めていた帯を解きかかる。クルクルと帯を解いたが、さて、それを置くべきところがない、草の葉も木の葉も、じめじめと水気がたつぷりで、地上にも水が滲む。お豊はちよつと当惑したが、すぐに気のついたのは、弁財天の祠の土台のところから根を張つて、ほとんど樹身の三分の二を水の方へさし出した一幹の柳でありました。その柳の、ちよつと程よい枝ぶりのところへ帯をかけて……それから着物と襦袢とを一度に……脱ぎかけると、お豊は自分の肌の半身が誰もいない闇の中で、あまりに白かったのに怖れたようでありました。思い切つて水に浸つていこううちに、不思議なもので、お豊は何とも知れない心強さを感じてくるのであります——この冷たい水の中に、尤もまだ秋のはじめで、水が苦になる時でないとはいえ、今までの怖ろしかった心が、だんだんに消えて行つて、水の肌にしみ込む気が、何とも言えぬ清々しさになつてゆくのであります。

頭の中で、ごつちやになつていた血の筋が、一すじずつに解けて、すんなりと下にさがつて来る、いつまでもこの水につかつていたい——こんな気持になるくらいですから、頭の上の木の梢で怪しげな鳥が啼こうとも、滝の水が横にしぶいて頭までかかろうとも、とんと気のつかないくらいにまで心が鎮まつてゆきました。

こうして後、森の中の修験者へ行つて逐一にその身上を語る。雲のことを語る。そうすれば自分は生れ更つた身になれることのように思われてきました。

その時分、この滝壺へ、また左の方のきわめて細い道、この道を伝わつて行つても護摩壇へは行けるのであるが、これはここに籠る修験者のほか滅多に通わない細道から、こちらへ徐々と下りて来る者がありました。

白衣を着ていることが闇でもよくわかるから、人間には相違ないが、暗い中を手さぐりで、ようようとこつちの方へ向いて来ます。

そうして、前の弁財天の傍の、ごく細い道のところまで辿つて来たのを、よく見ると、手には何やら杖をついて、面は六部のような深い笠でかくし、着物は修験者が着る白衣の、それもそんなに新しいものではないこともわかります。

この人は、やつと細道を辿つて来たのが、ここはやや平らになつたので、杖で行手をさぐりさぐり歩みはじめました。

お豊は、この時も一心ですから、少しもこの人に気がつきませんでした。

歩んで来た白衣の人は、しばらく、弁財天の小祠の傍に棒のように突立っていました。

闇の中に白衣ですから、うすら鮮やかというほどによくわかります。

「あれ——」

ようやくに気のついたお豊は狼狽しました。

「誰かいる——」

白衣の人は、ほとんど聞えぬくらいの小さな声で呟きました。

してみると、今までお豊がここにいたことは気がつかなかったのだ、お豊が狼狽して着物をとりかかろうとしたから、はじめて人のここにいることを感じたらしいのです。

「誰かいる——」

と小首をかしげた上で、お豊の方に向き直って眼をつけるかと思うと、そうでなく、白衣の人は、そのまま杖で地面を叩き、極めて徐かに大師堂の方へ小道を辿って行きます。

お豊は、ホツという息をつき、大急ぎで引っかけた着物の襟を直してその人の後ろ影を見送るのでありました。が、やっぱり、これはこの山に住む修験者か山伏のなかの一人——自分が今たずねて行こうとする修験者のお弟子かも知れぬ、或いはその修験者かも知れぬ。只人では

ない、里の人でないにきまつているけれど、それにしても困ったことであります。

「水垢離の現場を人に見られたら、その功力が亡びる」

これは、やっぱり六助がそう言った。

そんなら、たとえ修験者であろうとも、山伏であろうとも、人の眼に触れてしまった上は、もうもう水垢離の信心はフイになった——お豊は気が抜けたが、急に腹立たしさが込み上げて来ます。帯を結びながら、その白衣の男のあとを睨まえて齒噛みをしたのでした。水につかっていた時の心強さも清々しさも無残に塗りつぶされた業のつきない身体。清浄に返る懺悔を妨げに来た天魔と、白衣の人を、お豊としては怖ろしいほどの形相で見つめていると、気のせいか、その笠から洩れる背丈、恰好、ことに肩つきや、身の聳え、たしかに覚えのある姿であります。

この時、お豊の頭脳のなかにきらめいたものは、ほかでもない人相書。あの人相書のことを忘れていたのは、いま水につかっていた間ぐらいのもです。

その、背丈、恰好、肩つきや、身の聳えを見て、俄然として醒め来たお豊の眼に展開されるは机竜之助。いや、机竜之助の名は知らない、その変名の吉田竜太郎で、頭蓋の上から踵の下まで貫くほどに覚えている。

お豊は、二足三足、小走りにして、追いかけたくらいでしたが、

「もし——」

「ナニ……」

先へ行く白衣の人は、お豊に呼びかけられて、すつくと立ってしまいました。

「あの、あなた様は……」

お豊は、白衣の人の突いた杖にすがるほどに近寄って、下から笠の中をのぞき込むくらいに見ましたが、

「護摩壇の修験者様ではござりませぬか」

吉田とも竜太郎ともたずねてみなかったのは、もう一ぺん、声音を聞いてみたかったからです。

「いいや、修験者ではない」

もう充分である、修験者でなくてもよい、誰でなくても、その声の持主であればよいのである。

「それでは、あの吉田様……」

「吉田？」

かぶっていた笠がこころもち揺ぎます。

「竜太郎様——」

「あの三輪の植田丹後守様においでになった——」

「三輪の植田丹後守？」

「間違いはござんすまい」

お豊は、その白衣の袂に縋らんばかりに取付いたのでしたが、白衣の人は動かさず。

「違う、拙者は吉田竜太郎とやら、そんな人は知らぬ」

「まあ、知らぬとおっしゃいますか——」

疑うべからざるものを疑う、お豊は、しばし取付端に迷いました。

「そなたは女子のようじゃが、誰じゃ、どなたでござる」

「お忘れになりましたか、豊でございます。三輪の薬屋におりました……」

「豊……お豊……」

白衣の人の姿勢はこの時くずれた。

「うむ、その声に違いはないようじゃ、珍らしいところで会った」

「ああ、左様でござんしたか」

お豊は、その人にすがりつくように身をその足許に投げたのを、白衣の人、すなわち机竜之助は、徐かにその手で受けたが、二人が面を見合すべく、木の下間は暗いし、よし日と月がかがやき渡っても、竜之助はおそらく昔の眼でこの女を見ることはできません。

「まあ、あなたは……」

お豊は何から言い出して、あの驚き、喜び、つづいて来る怖れを表わそうかを知らないのです。

竜之助は、よりかかるお豊の身を両手に受けたが、何を思ったか、遽かに振り放つようにして、

「危ない、このまま別れよう」

背を向けて、そうして杖で徐かに地を叩いて歩み出そうとします。

「どうぞ、お待ち下さい」

お豊は、あわててその袂を捉えて、

「なぜ、そのように情なくなさいます、あなた様のお身の上もお聞き申さねばならず、私の身の上もお話し申し上げねばなりません」

それでも竜之助は振返らない。

「いや、こうしているのはあぶない、拙者の身も、お豊どの、お前の身も」

相変らず寒の水が石を走るような声です。けれども、その冷たい声が今以てお豊の腸はらわたに沁しみ込むようです。

「それはよく存じております。あの、あなた様は十津川からこちらへお落ちなすったのでございましょう」

「うむ——」

「そうして、あの、あなた様のお名前は、吉田竜太郎さまではございますまい」

「……………」

「机竜之助様とおっしゃるのでございましょう」

「それが、どうして知れた」

「もう、人相書が廻っておりまする」

「人相書が？」

「紀州のお役人や、藤堂様のお侍などが、毎日、あなた様をたずねておりまする」

「それ故、あぶないと申すのじゃ」

「竜之助はまた杖を取り直します」。

「まあ、待って下さい」

お豊は竜之助の行手にふさがるようにして、

「それに、あの、あなた様を兄の仇じゃと申して覘ねらっているお方がありまする」

「兄の仇？ そんなことは……」

なんとと言っても動かない声で、ふつつりと言いついて、行くこうとする方へ歩み出すのを、お豊は、その杖を奪うようにして、

「竜之助様、あなたは、あの時のお約束をお忘れはなさりますまい、わたしをつれて、江戸へ落ちて下さるあの約束をお忘れはなさりますまい、あの時のお約束通り、江戸へつれて逃げていただけだったのでございませう」

「江戸へ逃げたい？」

竜之助の面かおの表情は、笠でまるきり知れないけれども、その声は、キリキリと厚い氷を錐きりで揉もみ込むような鋭い嘲あざけりをも含んでいるのであります。

「わしと江戸へ逃げたい？ お豊どの、お前は亭持ちのはずじゃ」

「ええ……」

お豊は竜之助の前へその事情を自白しようとするところでした。それをどうして竜之助が知っていたのか、先せんを打たれて驚き且かつ狼狽ろうたいしました。

「それは余儀ない事情でございませう……」

「余儀ない事情？」

「あなたは、あなたには、わたしの心がわかりませぬ……」

「わからぬ」

「どうぞ、下にいて、ここへおかけなすって、わたしの苦しい事情をお聞き下さいませう」

お豊は手近の岩の上を払って、竜之助の手をとってそこへ腰をかけさせて、

「竜之助様、おっしゃる通り、わたしはいま亭持ちでございませう……この温泉宿の金蔵というのが、わたしの夫でございませう……その金蔵というのは、西峠の原で、

わたしたちに鉄砲を打ち掛けた悪者でございます、その悪者のために、わたしは自由にされているのでございませ……口惜しゅうございます。それはみんな、伯父のためや、植田様のためでございます。わたしが自由にならなければ、あの乱暴者は伯父様や植田様まで鑿殺にし、三輪の町を焼き亡ぼすと言っているのだから……竜之助様、どうぞ、人のために忍びきれない恥を忍んでいる私をかわいそうだと思つて下さいまし、一目、わたしを見てやって下さい、わたしにも、あなたのお面を見せて下さいまし」

「見えない、見えない」

竜太郎は面をそむけて、

「拙者の眼は見えない」

「エエ！」

お豊は、それを真事として聞かなかつたが、この時、

「お豊——お豊——」

遙かに呼ぶ声は、階段の下に待たしておいた金蔵の声であります。

八

宇津木兵馬もまた、この夜、宿を出て、ただひとりこの竜神の社内へ出て来たのであります。

今日で、この地に留まること三日、まだ机竜之助の在所がわからない。

十津川で山小舎が爆発した後、中にいた十人の浪士の

運命は悉くきまつたけれども、竜之助一人の行方だけがわかりませんでした。しかし、落ち行くところは必ずや紀州竜神——竜神は昔から落人の落ち行くによい所であります。

源三位頼政の後裔もここに落ちて来た。熊野で入水したという平維盛もこの地へ落ちて来た。ずっと後の世になつても、乱を避け世を逃れた人の言い伝えが土地の古老の話に聞くと幾つも残っているのではありません。

兵馬は十津川から追いかけて来る間、山中の杣に聞くとこんなことを言いました——ある夜、一人の武士が、この山間の水の流れて頻りに眼を洗っていた。最初は水を飲んでいのかと思つて、よく見たら、幾度も幾度も眼を洗っていたのであつた。杣と聞いて安心し、竜神へ出る道をよくたずねて、覚束ない足どりで出かけて行った……

たしかにそれ。そうしてどこかに負傷している。眼を洗っていた——かの火薬の烟に眼を吹かれたのでもあろうかと、兵馬は直ちに想像しました。

兵馬はこれに力を得て、息もつかず竜神まで追いかけて、さまざまの人の手を借りて、今日まで三日さがしたけれども、更にその行方が知れないのであります。

竜神八所を隈なく探すというのは容易なことではないが——これより遠くへは落ちられないわけがあるから、兵馬は必ずや、この附近で竜之助を見出し得るものと思つています。

そうしてかの七兵衛は、お松をつれて近いうち、ここ

へ来るはずになっていました。

兵馬は、尋ねあぐんでもなお気を落さない。今宵も、この境内を抜けてみようとするのは気散じのためのみではありませんでした。

「お豊、おお、そこにいたか」

といて、いま思案に耽りながら神社の境内を歩いて行く兵馬を、階段の方から呼びかけたものがありました。見れば、旅の風をした若い町人です。

「おや、これは違いました。はて、お豊はどこへ行ったろう」

その旅の男は、兵馬を尋ねる人でないと知って、手持無沙汰にあちらへ摺り抜けてしまいます。

兵馬は、それに拘わらず、社内の奥をめざして行くとして、ちようどかの大師堂の方へ足をはこぶと、その細道から、意外にもまた一つの人影が出て来ました。それは女でありました。

「おや、宇津木様ではござりませぬか」

女の方から言葉かけたので、

「おお、これは室町屋の御内儀」

その女はお豊でありました。

「どちらへお越しでございます」

「いや、どこかというあてもなく、この社内をぶらぶらと、あの奥の森の方まで行ってみようと思ひます」

兵馬が指したのは、護摩壇のある修験者の籠る森のとであります。

お豊は、やはり森の方を見上げて、急に不安の色が面

にかかり、

「あの護摩壇へでございますか。あれは、あそこへは、おいでにならぬがよろしゅうございます」

「何故に？」

「あれは、この土地で、きつい信心をなさる修験者がおりまして」

「修験者が？」

「はい、その修験者が、あれで護摩を焚いておいでなさいます。それ故、あそこへはおいでにならぬがよろしゅうございます」

「修験者が護摩を焚いているから行くと言われるか」

「はい」

「修法の邪魔さえ致さねば、近寄っても苦しゅうはあるまいと思う」

「いや、それがこの土地の習いで。強つてあなた様があるれへお越しになりたいと思召すなら、これから少し参りますると、御禊の滝というのがございます、その滝壺で水垢離をおとりになって、その後でなければあれへ参れぬことになっております」

「水垢離をとった上で？」

兵馬は小首を傾けて、

「それほどまでにして信心にも及ぶまい」

彼は、その護摩堂へ行くことを思い止ったものらしい。お豊は挨拶をして、かの階段を下りて行きました。

兵馬は、またそぞろ歩きをはじめたが、ふと思うよう、あの女は、たった一人で何しに、この淋しいところへ来

たものであろう——さいぜんの自分を呼びかけた旅の男は、お豊、お豊と、女の名を呼んでいた、或る種の女にはよくある迷信じみた信心から、ここへ夜詣りに来たものであろう。

兵馬はこんなことを考えて、社殿の前へ来ました。そこで社殿の背後を見上げるとかの護摩壇の森。そこへは、行つてはならない、行かないがよいと戒められてみると、どうも、それだけに不思議があるようだ。そうだと、自分が、この附近で、まだ足を踏み入れぬのはあの護摩壇の森——よしよし、なにほどのこともあるまい、上つてみよう。

兵馬は一文字に森をめがけて進んで行くのでした。無論、かの御禊の滝の水垢離などには頓着せずに——

九

机竜之助が隠れているところこそ、その護摩壇のうしろでありました。

それを隠しておくのは、かの修験者であります。

「御浪人、眼はどうじゃ、眼は」

窓を隔てた次の間から、修験者は、この世の人でないような声で尋ねてみると、

「うむ、よくない、だんだん悪くなるようじゃ」

机竜之助は、肱を枕に、破れた畳の上に身を横たえて、傍には両刀を置いて、こう答えたが、燭台の光で見ると、例の蒼白い面がいっそう蒼白く、両眼は閉じて——

左の眼のふちにはうつつらと痣がある。

「それはいかん、滝の水で洗うて来たか」

修験者は言う。竜之助は答えて、

「さいぜん、滝まで下つて行つた、どうやら人がいるよ
うだから、やめにして帰つて来た」

「ナニ、人がいた？ 滝に人がいたか」

「うむ、一人の女が滝を浴びていた」

「女が？ 滝を？」

修験者は言葉をきつて、何やら考えているようです。

「修験者殿、雨が降つて来たようじゃな」

「左様、雨じゃ」

「なんとなく、木の葉も騒ぐようだ、風も出て来たと思
ゆるわ」

「おお、風も出て来た」

しばらく静かであつて、室外はポツリポツリと雨の音がする、サーツと風の騒ぐ音もする。

「さて、修験者殿……」

竜之助は、やや改まった声で、

「いつまでもこうして御厄介になつてはおられぬ、拙者は立退こうと思う」

「待て待て、その眼を充分に癒してからにするがよいぞ」

「治るかよ、この眼が」

「治る、信心一つじゃ」

「うむ——」

竜之助は、また黙つた。

「しかし、その信心ができぬ。拙者にはこうなるが天罰

じゃ、当然の罰で眼が見えなくなったのじゃ、これは懃なまじい治さんがよかろうと思う」

竜之助は独ひとりごと言のようになう、修験者はこれについて返事がない。竜之助が独言のようになう時は、修験者はもう護摩壇に上っていて、それを聞かなかったものらしい。

「眼は心の窓じゃという、俺の面から窓をふさいで心を闇にする——いや、最初から俺の心は闇であった」

竜之助の面には皮肉な微笑がある。窓の外の闇はいよいよ暗くして、雨は相変らずポツリポツリ、風もザワザワと吹いている。

心の闇に迷い疲れた竜之助は、こうしたうちにも、うつらうつらと夢裡ゆめに入る。

ちょうどこの時分は、金蔵とお豊も室町屋へ帰っているよ、宇津木兵馬は、お豊の言い分も肯きかず、このほとりへ上って来たはずであるが、雨に恐れて引返したことであろうと思われる。

竜之助は肱ひじを枕に夢に入る——

「おお、何を泣いている、お前はどこの子じゃ」

いたいけな男の子、道の真中に立ち迷うて、さめざめと泣いているのを、竜之助は傍に寄って、その頭を撫なでながら、

「泣くでない、お前はよい子じゃ」

竜之助の眼はハッキリとこの子供を見ることができ、自分を、自分ながら不思議に堪えないで、

「もう、日も暮れる。さ、わしが送って行って上げる、お前の家はどこじゃ」

「坊には家がない……」

子供はしゃくり上げて言う。

「家がない？ では、お父さんはどこにいる、父親は……」

「知らない……」

子供はやっぱり面かおを上げないのです。

「知らない？ お母さんは、母親はどこにいる」

「知らない、知らない」

「はて、お前には、家もない、父も母もないのか」

竜之助は、この迷子まいごを、どのように扱ってよいのか当惑して、空しく頭を撫でながら、

「坊や、では、どうしてお前はここへ来た、誰につれられてここへ来た」

「知らない……」

「困ったな、この夕暮に、この淋しいところへ子供をひとり捨て置いて……よしよし、拙者わがしが里まで連れて行って上げよう、さ、おじさんに抱かれてみる」

「いやだ、おじさんは怖い」

「怖い？ 怖いことはありはせぬ、さあ、このおじさんが里まで抱いて行って上げる」

「いや！ 坊は、おじさんは嫌いじゃ」

「嫌い？ では誰がよいのじゃ」

「与八さんが好き。与八さんが来るまで坊は、ここに待っている」

「ナニ、与八さん？」

竜之助は、この声を聞いて身の毛がよだつようになり
ます。

「坊や、お前の名は何というのだ……うむ、名前は忘れ
はすまい、言つてごらん」

「坊の名は郁太郎……」

「ナニ、郁太郎？」

竜之助は摺り寄つて、子供の面に当てた紅葉のような
手を振り払つてその面を覗き込もうとすると、

「いや！ いや！」

子供は竜之助の手を振りもぎつて、あちらへ逃げて行
きます。

「お待ち……坊や、お待ち……」

竜之助はそのあとを追いかけて、

「郁太郎……お前の父親はここにいる」

竜之助は大きな声で呼びかけたが、郁太郎は小さな首
を振つて、

「嘘！ 嘘！ 坊には、お父さんというものはない」

小さい足どりで一散にかける。

「与八さん——与八さん——」

どこかで返事があつて、

「おうい、郁坊やあい」

憐れむべし、この子、己れが実の親を厭うて、あらぬ
人の名を慕うて呼ぶなり。

竜之助は立ち止まって、はふり落つる涙を払った手を
見ると、涙と思つたのは悉く血だ。

竜之助は立ち尽して、その子の駈け行く方を見ている
と、ノツソリと闇の中から一人の肥え太った男が出て来
た。

「おうい、郁坊やあい」

その声は田舎訛りの言葉であるけれども、なんとも言
えぬ慈愛に富んでいる声でありました。それを聞きつけ
ると子供はもう嬉しそうに飛びかかつて、

「与八さあん——」

父を知らず、母を知らずと言つた児は、父と母とを一
緒にしたよりも強い懐かしさでこの太った男に抱きつい
てしまいました。

「おお、郁坊、ここにいたかい、よくいてくれたなあ」

温かい手で、すぐ抱き取つて、頬ずりをして可愛がる。
その面はかがやいて、後光がさして来るようです。泣い
ていた子供も晴々して、ふいとこちらを向きましたが、

竜之助を見ると泣きそうな面をして、

「怖い人——あそこに怖い人がいる」

指して示すと、抱いていた肥った男は慈愛にかがや
く面をこちらに向けて、

「怖い人ではないよ、坊やのお父さんはあの人だよ」

「嘘だ！」

子供は、どうしても承知しません。

「嘘ではない、あの人は坊やのお父さんだけれど、坊や
はあの人の傍へは寄れないのだよ」

「でも、坊には、お父さんはないと言つたじゃないか」
「父親のない子があるものか……坊やにも、お父さんも

あれば、お母さんもあるだよ」

「お母さんもあるのかい……どこにいるんだい」

「それはなあ……」

「早く、そのお母さんのところへつれて行っておくれ」

「うむむ、つれて行くとも」

抱き上げた子を、ゆすぶって、与八と言われた男は、竜之助の方へ、そのなんとも言えない慈愛の面を向けて、あちらへ行ってしまおうとするから、

「与八——」

竜之助は、あわただしく呼びとめてみました。

「与八——待ってくれ」

足が動かない——

「与八——郁太郎」

声の限りに呼ぶと、二人の姿は見えずして、光明の雲が、あたりいっぱいにかがやく。

「与八——郁太郎」

咽喉が裂けたと思われる時に、夢は覚めた——眠っていた時にありありと見えた人の面が、覚めては見えない。

「誰だ、そこへ来たのは何者だ！」

修験者の地を突き貫くような叫び。竜之助は何事が起ったのかと思う——誰かこの夜中に、ここへ来たものがあるらしい。雨も風も歇みはしないのに。

十

「誰だい、誰だい——おお痛っ」

金蔵は、しばらく起き上げれないで、腰のあたりをさすると、兵馬は丁寧かじまうに介抱して、

「お怪我はないか」

「いや、もう大丈夫。お前さんは……お豊ではなかったね」

起き上れないうちから、もうお豊のことです。

兵馬は傘を拾ってやると、金蔵は立ち上って面をしかめ、

「これはどうも——ナニ、もう大丈夫でございます」

お礼もろくろくに述べず、傘を受取ってまたも石段をめぐけて上りはじめようとしたが、

「あの、もし、あなた様、この社やしらの中で女の姿をお見かけになりませんでしたか」

「女の姿を？」

「はい、この室町屋の女房のお豊という女を」

「ああ、お豊どのならば」

「はい」

「さきほど、この石段を下へおりて行きました」

「石段を下へでございますか」

「いかにも」

「そんなら、行違いに家へ帰っておりませんか」

金蔵は上りかけた足を石段から引いて、

「それでは、帰ってみましょう」

もと来た方へ引返して大急ぎで駈けて行きます。

兵馬は、そのあわただしさに笑いを禁じ得なかったが、そんなことは別に兵馬の気にかかることではない、気にかかるのはあの護摩壇のことだ——堂の傍へ近寄ると、中から修験者の声で、

「何者だ！」

と呼ばれたが、強いて土地の人が神聖と立てる修法を妨げるのもよくないと、帰っては来たが、なんとなくあの護摩壇に心が残るようだ。よし、改めて修験者に会ってみよう。

こう心をきめて室町屋まで帰って来ると、家は思いのほかヒツソリしていました。雨が降っているから、障子を立て通しにしてあったのをあけて入ると、帳場のわきに金蔵が苦り切って坐っている、その傍には番頭がピリピリして跪まっている。

「お帰りなさいまし」

と言ったが張合いのない声でした。苦り切った金蔵と兵馬とは、ふと面を見合せると、兵馬は、いま石段から転げ落ちた人が、どうやらこの人らしいと思ったが、そのままにして、自分は己れの部屋へ入ってしまいます。

床を展べに来た女中に聞いてみると、お内儀さんが、さつき出たまま、まだ帰らないので、旦那様が焦れて怒っているのだと言いました。そんなことは兵馬が聞いたって別に心配することではありませんでした。

兵馬が二階へ上った時分、金蔵の眼が一層険しくなっ

て、天井を睨みつけたようでしたが、

「喜六、今のはありや、うちのお客か」

「へえ、左様でございます」

「いつごろから来た」

「旦那様が、和歌山へお出かけになって間もなく」

「そうか……」

金蔵は番頭からこれだけ聞いて、また兵馬の通って行ったあとを睨みつけて、

「一人か」

「へえ、お一人でございます」

「侍のようだな」

「左様でございます、十津川騒ぎからこちらへお越しになりました、藤堂様の組だそうでございます」

「何しに来たのだ」

「兄様の仇をたずねておいでだそうでございます」

「兄の仇？」

金蔵は、また苦り切って押黙ったが、

「聞いて来い、今のあの若侍に聞いて来い」

突然、猛るような大きな声でこう言い出したので、番頭は、

「何でございます、何をお聞き申すのでございます」

「あの若侍が知っている、お豊の行きどころを知っている」

「あの方がございますか。あの方がお内儀さんの……」

「知っている、聞いて来い」

金蔵は、怒鳴りつけて番頭を立たせました。

番頭は、何のことだか一向わからないけれど、まあ言われる通りに聞いてみよう、怖る怖る兵馬の部屋をさして出かけて行きます。

「そうだ、それに違いない——」

金蔵は、ひとりで齒噛みをしています。

「前髪立ちの若衆と、三十前の年増だ……年上の女に可愛がられていい気である奴もあれば、ずんと年下の男を滅法界に好く女もあらあ——油断がなるものか。第一、こちらからお豊のやつが上って行く、上から若侍が下りて来る、ほかに誰がいた、証拠を押えたようなもんだ——お豊を隠しやがったな、あの若いのが」

金蔵の眼は、みるみる火のように燃えてゆきます。

金蔵は英雄でも偉人でもないけれど執念深い——執念のためには命を投げ出して悔いがない男である。思い込むと蛇のように執拗くなる男であります。飛んでもない、人もあろうに宇津木兵馬は、この男の怨みの的となってしまうしました。お豊と兵馬とは金蔵の留守の間に不義をした——と思ひ込んでしまった金蔵の怨みは、もう、誰がなんと云っても解けません。

「覚えてやがれ！」

この二月ほど真人間に返って、驚くほど堅気になり、真黒くなって家業に精を出し、和歌山へ行ったのも宿屋の实地調べで、これからますます家業へ身を入れようとした金蔵の心が、またもがらりと変って、もとの無頼漢になるのです。

兵馬が旅日記を書き終って、いま寝ようとするところへ、金蔵がやって来ました。

「御免下さい」

言葉が荒っぽく、眼の色が血走って立居が穩やかでない。

「これは、どなたじゃ」

「へえ、金蔵と申しまして、こここの亭主でございます。お初に——いや、さつき竜神の石段でお目にかかったのは、たしか、あなた様でございますましたな」

「左様、貴殿が御亭主でござったか、留守中お世話になりました」

「時に、あなた様——」

金蔵は眼に角を立てて、口のあたりが引きつり、呂律が怪しい、よほど飲んで来たものです。

「お前様のおっしゃるには、わしの女房のお豊は、うちへ帰っているはずでございますが、まだ帰っておりませんぜ」

「なに、御内儀が……」

兵馬は金蔵の言いがかりぶりが無礼に見えるので、少し向き直り、

「まだお帰りが無い？ 拙者は、あの社内であつと会うたばかりだからその後は知らぬ」

「いったい、お豊のあまは、何のために、この夜中に、あの社内へ出かけたものでござんしょうねえ、お武家様」

「何のためとは」

兵馬が、そんなことを知るはずはないのを、金蔵はか

らみつくように、

「お前様は、それを御存じであろうと、わしはこう睨んだのだ」

「なんと、拙者がそれを知っている？」

「そうでございます、あの、人も行かない淋しいところを、この夜中に、つまり人眼を忍んで、行きつ戻りつなされたのは、うちのお豊と、それからお前様のほかにはない」

「うむ」

「ですから、わしは、お前様とお豊とが、しめし合せて、なにか人に聞かれて都合の悪い話を、あそこで、おやりなすつたものところ思うんだ」

「滅多なことを言われる」

兵馬は屹となった。見れば酔ってもいるようだが、それにしても聞き捨てならぬ一言である。

「ナニ、滅多なことが、どうしたんだ。さあ女房を出せ、おれの女房のお豊を出せ。前髪のくせに、ふざけたことをしやがる。どこへ隠した、早く、おれの女房のお豊を出せ！」

金蔵は、持って来た脇差を抜いて振りかぶり、大胆にも兵馬をめがけて切ってかかりましたけれど、これは問題にもなんにもなりません、すぐに刃は打ち落されて、兵馬の小腕に膝の下へ引据えられ、

「無礼にもほどがある——店の衆——誰かおらぬか」

兵馬は金蔵を組み敷いておいて、声高く店の者を呼びました。

金蔵は家族や店の者が総出でつかまえて、欺し賺しつ引張って行きました。

父の金六は兵馬の前へ頭を下げて詫びをする。兵馬は別に深く咎めるつもりはないが、言いがかりにしても潔くない言いがかりだと思いました。

明日は宿を換えようと心に決めながら浴室へ行く、寝る前に一度、湯に入ることがきまりになっている。そこから浴室までは大分ある。

兵馬は手拭を持って長い廊下をしずしずと歩んで行く。お客が少ないから明間が多く、蒲団や夜具を抛り込んだままもある——兵馬は足音しずかに行くと、そのうちの間からふいに飛び出して廊下を横に切って、忍び足にかけ行くものがある。面は手拭でかくして手には何やら包みを持っています。

怪しい奴！ 兵馬は直ぐに泥棒だと感じました。見のがせることではない——今しも、開け放してあった戸の口から外へ出ようとする盗賊の襟首を持って引き下ろしました。

兵馬であったからよい、ほかの者ならば、けたたましく、泥棒！ 泥棒！ と鳴りを立てるところです。兵馬に無言で引き下ろされて、泥棒の力のまた脆いこと、一たまりもなく引き倒されて、

「どうぞ、御勘弁下さいまし、お見のがし下さいまし」

賊は手を合せて拝むと、兵馬はかえってそれに驚かされました。

「おお、そなたは……」

「何もおっしゃらず、どうぞ、お見のがし下さいませ」
「合点のゆかぬこと」

この泥棒はお豊でした。兵馬には、なんだか実にわからなくなっていました。

「これには深い仔細のあることでございます、どうぞ、お情けに何もお聞きなさらず、このままお見のがしを願います、あとでわかることでございますから」

面をかくした手拭をとりもせずにお豊は、一生懸命で兵馬に見のがしてくれと歎願するのです。

「そなたの夫、金蔵殿とやらは、そなたを探しておられますぞ」

「はい、金蔵に知れますと、わたしは殺されてしまいました、どうぞ、お慈悲に、このままお見のがしを願います」

見逃すべきであるか、捉えて夫に引渡すべきであるか、兵馬も、しばしその扱いに迷うたのでありましたが、あの無茶な乱暴男、この有様を告げたら、なるほど、この女の言う通り女は殺されてしまうだろう、まあ、この場は見のがしておいた方がよからうと兵馬も分別しました。

「どうぞ、お見のがし下さいませ、決して、あなた様のお身に御迷惑のかかるようなことは致しませぬ、一生の御恩でございます」

お豊は包みを拾い上げて、戸の外の闇へ飛び下ります。兵馬はそれを追いかける気になりませんでした。

十一

兵馬はその翌日、宿をかえた——兵馬には、こんなばかばかしいことにかかわっていられない。金蔵が恨もうと、お豊が帰るまいと、別に心に残ることはなかったが、兵馬が去ってから後の室町屋には大変が来ました。その晩のこと、金蔵が荒れ出した——その荒れ方も尋常ではない、一室に押込めて、家中総出で警戒していたにもかかわらず、金蔵はついに荒れ出して脇差を抜いた。それでもって、支える奴を縦横無尽に斬り立てた。

父親の金六も手を負わされた、母のお民も斬られた。それから、台所に飛んで出て、火を焚いていたおさんどんを蹴飛ばして、その火を取って投げ散らした——その火は障子についてめらめらと燃え上る。

血に染んだ脇差を振り廻して表へ飛んで出た。
忽ちの間に湯元村をひっくり返すほどの騒ぎとなった。

金蔵が血刀を引っかぶって通りへ飛び出して、
「お豊、兵馬」

と名を呼んで二人を求めんと狂い廻る。兵馬はこの時、こんなこととは知らずに神木屋というのへ宿を替えて、その朝は、昨夜のあの護摩壇へ行こうとして大師堂の傍まで来たのであったが、不意に火事よという声で振り返って見ると、すぐ眼の下の、室町屋のあたりから黒煙が渦をまく。

兵馬も宿には大事のものが残してないではない。心にかかるからそのまま引返して湯元へ来ました。

火事は室町屋から出たので、今しも台所を吹き貫いて、二階の廊下を焼き抜いて、真紅の炎がメラメラとのぼる。

兵馬は神木屋へかけ戻って、店の若い者と一緒に始末をしている。

「室町屋の若主人が、急に気がふれ出した……」

兵馬は合点した。あの金蔵という奴が荒れ出したな——こうと知ったら、もう少し手厳しく戒めておけばよかつたと思いました。

けれども、金蔵は三輪でやらなかったことをここでやるのですから、どのみち金蔵としては、やるべきことをやってしまいました。お豊もまたあの時、金蔵を捨てるはずのを今ここで実行したものですから、お豊がなくなつて金蔵の執念が勃発するのはあたりまえのことでありました。

兵馬は、それを知らないで、ただ無茶な乱暴男もあればあるものと思つています。

この火事は人家の方へ出なかつたけれども、それより悪いことは、山へうつってしまったことです。人家の火事は消しようがあるが、山の火事は消しようがない——室町屋の裏手へつづく杉林に、それが燃えついたからたまりませんでした。

目通り何尺、高さ何丈という大木に火のついたほど始

末に困るものはありません。登るには登れず、水をかけようにも下からは届かず。

それを防ぐには、伐り倒すばかりであります、と言つて、それほどの大木を苧殻を切るようなわけにはゆきません。

いよいよ杉山に火がうつった時、各字の者は手を束ねて、せめて、人家へ焼け出さないように用心するよりほかはありませんでした。

人が手を束ねて見ていれば、火はいい気になって延びる、この山を焼き抜いてあの山へと、遠慮なく延びる。

それでも竜王社の方面は消防に力をつくしたために火の手が鎮まったが、これはかえって一方に火勢を追い込んだようなもので、山の手に向う火の手は更に一層の勢いを加えることになりました。木がなくなるところまで焼け抜いておのずから止まるか、そうでなければ、天の池が乾くほどな大雷雨でも来らぬ限りはこの山火事が続きそうだ。

人間業でこの火を防ぐはあの護摩壇の法力あるばかりだと、そこへ気がついた各村の総代は、打揃って裸になつて水垢離をとつて、かの護摩壇の修験者へ行って鎮火の御祈祷を頼むと、修験者は、

「遅い、遅い」

と冷淡に言つてのけた。

「昨夜、人知れず、御禊の滝で水を浴びた女をつれて来い……その女が竜神村の禍いじゃ、その女をつれて来い」

さては、女の身でこの神聖な竜神の霊場をけがした者がある。その女を捉まえて、人身御供に上げるでなければ、この火は鎮まらぬ、火を消すよりも、その女を求めることが急だ。

土地の人は血眼ちまなこになって飛ぶ——

その女というのは誰——火を出した室町屋の女房、昨夜から行方知れずになったというお豊が怪しい。お豊はどこへ行った。室町屋の内儀はどこへ行った。

兵馬はこの時、ぜひなく神木屋にとどまって火を心配していた——今日あたりは七兵衛お松がこの地へ着くはずであるのに、あの火が道をふさぎはすまいか。

昨夜から降ったり止んだりしていた雨が、この時分になつて、だんだん大降りになつてきた。

その翌朝、山火事はいよいよ盛んに燃えている。雨もどんどんと降りつづいている。お豊を探すべく八方に飛んだ人がまだなんとも報告を齎もたらさないうちに、またしても人を驚かす報告が一つ持ち来きたされた。

「河原に人が殺されている」

それを見つけたのは里の子供でした。村の人が駈かけつけて見ると、昨夜来の雨で日高川の水嵩みずかさが急に増した。蛇籠じやくかごにひっかかった一つの体はまだ若い男でありました。

「室町屋の金蔵さんだ！」

「斬られてる！」

それはたしかに金蔵である、斬られていることも確かである。

宇津木兵馬は宿の人に頼まれてその検視に行った。

兵馬が金蔵の死骸しがいを見て衷ちゆうしん心から驚いたのは、その死にざまが怖ろしいからではない、また彼の身の成る果てを不憫ふびんと思ひやったからというのでもない、その斬口きりぐちの鮮あざやかさ！ 心得ある人より見れば、斬口でその斬った人の手腕がわかる、否いな、手腕のみではない、それが何流の剣道に出でてどの程度まで行った人だということもわかるはず。

右の肩から真直ぐに、それは力任せにやったので何でもない——冷笑しきつて軽く一振り、曳えいとも言わず二つに切つて落すべきものを落さずに、いくらか残しておいて刀を鞘さやに入れたが、おそらく血は刀に附く違ちががなかつたらう——切ると一緒に高いところから足で蹴落けおして（その証拠には、かすり疵きずがいくつもある）、下へ転ころがって行く屍体の音を聞きながら、蚊をつぶしたほどにも思つてはいなかった——兵馬の眼には、斬った人の面影おもかげがありありと浮ぶ。

十二

眼の前にあつても、時が来きたらねば会えませぬ。竜之助と兵馬とは、山城、大和、伊賀、紀伊の四力国を、あとになり、先になつて、往ゆきつ戻もどりつしましたけれど、とうとうそのいづれでも会うことができないのです。竜之助は敢あえて兵馬を怖れて逃げ隠れているのではない。兵馬は目の先に近づいて、それでどうも刃やいばを合せることが

できないのです。

今、ここに竜神村の災難、七兵衛やお松がどうしてこへ来るかを知らねばなりませんけれど、兵馬はそれを顧みている違いとまがない。

竜之助の落ちて行く方面は、日高川に沿うて四十余里の屈曲を塩屋の浦まで出て、船でどちらへ行くか、または高野領こうやりょうを経て西国筋さいこくすじへでも落ちるか、兵馬はそれを測って単身結束してそのあとを追わねばならぬ。

兵馬が竜神村を立った時も、まだ竜神村の火は消えませんでした。